

区制100周年記念

みなとの100年、みんなの物語

～これまでも これからも この地域と～

港区には、地域ごとに紡がれてきたまちの物語があります。区制100周年を機に、その過去と今を語り合い、これからの未来をともに思い描くインタビュー企画をお届けします。

池島地域

池島地域は、港地区復興土地区画整理事業により基盤整備が進み、市営住宅など中高層住宅を中心とした居住エリアが形成されました。昭和46(1971)年には自治省(現・総務省)のモデル・コミュニティ地区に指定され、近隣センターも整備。大阪湾岸部の住宅供給地としての役割を担ってきました。そんな池島地域で、永年地域活動に携わる松尾さんにお話を伺いました。

始まりは、池島小学校PTA

松尾さんが地域活動に深く関わるようになったきっかけは、池島小学校のPTA組織の立ち上げでした。昭和50(1975)年、三先小学校と八幡屋小学校から池島地域の児童を収容するかたちで池島小学校が開校します。しかし、開校当初はPTA組織が存在していませんでした。三先小学校で実行委員を務めていた松尾さんは、PTAの立ち上げに力を注ぎます。「いろんな学校から資料を取り寄せて、会則を作るところから先生方と一緒に取り組みました。何もなかったところからのスタートだったので、本当に大変でしたね。」

それから時は流れ、池島小学校は今年で創立50周年。松尾さんも現在、記念事業の準備に追われています。しかし、少子化などの影響により池島小学校の児童数は減少しており、令和11(2029)年には八幡屋小学校、港晴小学校との統合が予定されています。「仕方のないことですが、やはり寂しさはありますね。歴代の先生方も皆さん本当にいい方ばかりで、思い出がたくさんあります」。

「何事もみんなで」が池島流

池島地域での大きなイベントは、毎年11月23日に催される「池島ふれあいまつり」。もともとは児童養護施設『海の子学園 池島寮』の主催でしたが、「お手伝いを



するうちに、これは地域を挙げて関わろうということになって、今では地域との共同で開催しています。ほかに、グラウンドゴルフ大会や盆踊り、敬老大会など、一年を通じて地域住民が交流できる行事が池島にはたくさんあります」と松尾さん。そして、どんな行事も「みんなで一丸になってやるのが池島らしさ」と言います。「何事につけても池島は、どこかの組織が勝手にやるのではなく、みんなに声を掛ける。ネットワーク委員会や女性会など、いろいろな組織が集まって会議をして、一緒にやる。それだけつながりが密だということです。」

自身も、他の地域から来た人がすぐなじめるように、「誰にでも分け隔てなく、誰とでも仲良く」を心がけているという松尾さん。ただ、高齢化で地域活動に参加する人が減っていることを懸念しています。「子どもの数も減っていますし、市営住宅ももう少し若い世代の方が増えたらいいというのが、池島の願いです。そうなれば、

もっと地域も活性化すると思います」。

未来につなぐ地域のバトン

松尾さんは、女性の教養と地位向上をめざす大阪市地域女性団体協議会にも長年にわたり携わってきました。三先地域の女性団体協議会に参加していたことから、池島地域でも女性団体協議会を立ち上げ、自らは書記に就任。市の女性団体協議会でも会計監査を務めてきましたが、そちらは昨年3月で勇退し、これからは池島地域の未来について考えたいと言います。「池島の女性団体協議会は、これからも大切に存続させたいと思います。いろいろな行事には個人でも参加できますが、やはり声を掛け合える団体があったほうがいい。頼まれると断れない性分で、これまでたくさんの地域活動に長くかかわってきましたが、そろそろ誰かバトンを受け取ってくれる方がいるといいなと思います」。



松尾フサ子さん

昭和10(1935)年、現在の岡山県倉敷市(児島地域)生まれ。結婚を機に大阪市港区へ移り住む。港保育所の役員をきっかけに、池島小学校PTAの立ち上げなど、さまざまな地域活動に携わる。大阪市地域女性団体協議会に参加し、港区地域女性団体協議会では長年会長を務めた。現在も地域活動を続け、港中学校では学校協議会委員長として教育にも関わっている。

港晴地域

港区中部、安治川河口左岸に位置する港晴エリア。港地区復興土地区画整理事業で2メートルの盛土を含む基盤整備が行われ、港湾労働者の住宅地として栄えました。もとは八幡屋新田の一部でしたが、昭和43(1968)年に町名が「港晴」になりました。その地で永年に渡り、氷屋の事業を営む島中さんに、港晴での暮らしを振り返っていただきました。

二度の大型台風を経験

島中さんが疎開先の愛媛県から港区に戻ってきたのは、14～15歳の頃。戦後10年ほど経った昭和30年代のことでした。当時の住所は三条通一丁目一番地。「その頃は地盤が今より2～3メートル低くて、そこを市電が走っていました」と振り返ります。

高潮対策等のため区内では昭和23(1948)年から盛土の工事が始まりましたが、昭和36年(1961年)の第二室戸台風ではまだ工事が完了しておらず、市電の路線がまるで川のようになったそうです。「水がすぐ



昭和15(1940)年、父の赴任先であった広島県の海軍官舎で生まれ、生後3か月で母の実家がある大阪市港区へ。戦時中は愛媛県に疎開し、義務教育を終えて帰阪。祖父が創業した氷屋「中塚屋」を継ぎ、業界団体の副理事長を務める。地域では港晴連合振興町会会長を長く務め、現在も三津神社氏子総代会長として地元へ貢献している。



かったですね。埠頭まで海の様子を見に行ったら、岸壁すれすれまで海面が上がっていて。これはあかんと思って走って帰ったら波が追ってきて、ものの2～3分で量が浮いて腰まで浸かりました。」

昭和25年(1950年)のジェーン台風は、祖母の葬儀のため港区に滞在していた際に遭遇。「水がなかなか引かず、ボートで移動していました。まだ子どもだったので、果物屋さんから流れてきたミカンやリンゴを拾ったのを覚えています」と、当時の記憶を語ります。

時代と共に変化した氷屋の商い

島中さんの家は、祖父の代から続く氷屋。「母方の祖父ですが、厳しい人でした。娘婿だった父が跡を継ぎ、私が三代目。今は息子が四代目を継いでいます」。現在は氷以外にも燃料や包装資材なども幅広く扱っています。

電気冷蔵庫やクーラーがまだ普及していなかった当時、氷屋は



とても忙しく、あちこちの家庭に氷を配達していたと言います。「家に風呂がありませんから、みんな銭湯に行くんです。その帰りに汗をひかせるため、かき氷を食べる。夏場は、夜11時くらいまでかき氷用の氷を運びました」。生活の中に氷が欠かせなかった時代、区内には30軒以上の氷屋があったとか。その縄張りを仕切っていたのが、島中さんの祖父でした。「町の顔役というか、その頃はどこの町にもそうやって仕切る人がいたんですね。気の荒い連中も多い中、うまくまとめてやっていました」。

昭和45(1970)年に開催された万博では、日本館に氷を卸したこともあったそうです。しかし、電化製品の普及によって、氷屋の軒数は徐々に減少。ここ数年はコロナ禍の影響もあり、現在は島中さんのところを含め、2～3軒を残すのみとなっています。

願いは、明るく住みよいまち

令和6(2024)年3月末まで、港晴連合振興町会会長を務めていた島中さん。手が足りないから手伝ってほしいと言われて地域活動に関わったのが50代のことでした。「最初は名前だけでいいと言われてたんですけどね。どんどん頼まれることが増えました。それでも、これまでの経験を振り返って「周りがいい人ばかりで、みんな助けてくれました」と笑顔で語ります。

最後に、これからの港区に期待することについて、お聞きしました。「私もいろいろな時代を経験してきましたが、無心でここまでやって来ました。どんな時代でも、その時代の波に乗っていくことかなと思います。我々がああして欲しい、こうして欲しいというより、若い世代の人の考えがあると思います。今よりさらに明るく、住みよいまちになってくれたら嬉しいですね」。